

森の賢者と呼ばれるフクロウ

～その生態と、失われつつある自然のこと～

フクロウは、映画にも登場して人気が上がり、一時期ペットとして流行しました。

僕は鳥が好きで、その中でも特にフクロウに興味がありました。また以前から、自然について調べたいと思っていたので、フクロウの生態と、フクロウが暮らす環境などについて調べることにしました。

調査の方法としては、本を読んで調べたり、インターネットで調べたり、澤本等さんから教わったり、掛川市の花鳥園に行つて実物を見たりしました。

フクロウは、メンフクロウ科とフクロウ科の2科からなり、世界全体で140種類ほど見つかつていて、南極を除く世界中に分布しています。

日本には、その内10種類ほどが生息していますが、日本に元々からいる種は4種類ほどであることが分かっています。

夜行性の肉食の鳥類で、小型

の哺乳類（ネズミや野ウサギなど）を餌とし、時にはスズメなどを捕らえることもあります。

鋭い爪を使って獲物を捕獲します。

フクロウは、主に広葉樹の幹にできるウロ（洞穴）の中に住んでいて、その多くは単独またはつがいで生活しています。

木のウロは、入り口は狭く見えますが、中はかなり広いようです。杉などの針葉樹にはウロが少ないため、生活の場としては、あまり適さないようです。

フクロウは、自然豊かな森に住み、主に真夜中に行動しています。瞳孔が大きく、弱い光にも敏感なため、暗い夜でも自由に飛ぶことができます。

また、フクロウの羽毛は柔らかく、ほとんど無音で飛行できるため、獲物に察知されにくいようです。

近年では、森林の伐採などの



元気になったフクロウ

フクロウの生態と、自然環境を考える姿勢

◆中川根中学校 大石悠馬さん（3年）の総合学習の内容から◆

イノシシについての研究発表

放鳥後、フクロウが飛んでいった方向を見続ける生徒たち

間近で見るフクロウに興味津々





影響で、その生活の場を追われてきています。

また、餌となるネズミや野ウサギの減少も心配されます。

この自然を守り、フクロウが安心して暮らせる森をつくるために、人間が何をしなければいけないのか、これからも学んでいきたいと思っています。

フクロウとの 出合いを通して

昨年4月から総合学習の一環として「フクロウ」の生態などを学んできた大石悠馬さん。

そして学習の最中に飛び込んできた「フクロウを保護した」というニュース。

教頭先生から話を聞いて、かなりビックリしたそうです。

そして大石さんは、この事件をきっかけに、より一層フクロウについて興味が増したと言います。

「家の裏山でよく鳴き声を聞くことがあるのでフクロウがいることは知っていたけど、野生の実物を見たのは初めてだったので、本当に身近にいるんだと感じました。そして、更に学習意

欲が湧いてきたんです。

実は、成果の半分以上はこの事件の後に学んだことなんです」

学校に戻ってきたフクロウは、1月20日、大石さんの発表の横で愛らしい姿を披露しました。

そして20日午後、大石さんら生徒約20人の手でフクロウは森へと放されました。

フクロウを帰した後、大石さんは「元気に飛んでいってくれて一安心。飛べなかつたらどうしようと思っていた」と、心境を語ってくれました。

「この地域にはフクロウが普通に暮らしている。それは豊かな自然があるから。この自然を守るために、考えなければならぬことがたくさんあると思うから、みんなにも考えてもらいたい」とも。

総合学習の最中に生まれた偶然の出合い。1羽のフクロウが与えてくれた、自然を守りたいという心。

この「総合学習」については、1月20日に行われた発表会で一つの区切りを迎えました。

しかし、大石さんは付け加えます。

「みんなにも考えてもらいたいし、自分でも考えていきたい。まだまだ解らないことがたくさんある」

発表会では、大石さんの他にも「自然環境」や、「川の生態系」、「ゴミの問題」、「減少を続ける森林」、「この地域に生きる動物」、「絶滅に瀕している動物」など、環境に関する様々な課題に取り組んでいる生徒の発表がありました。

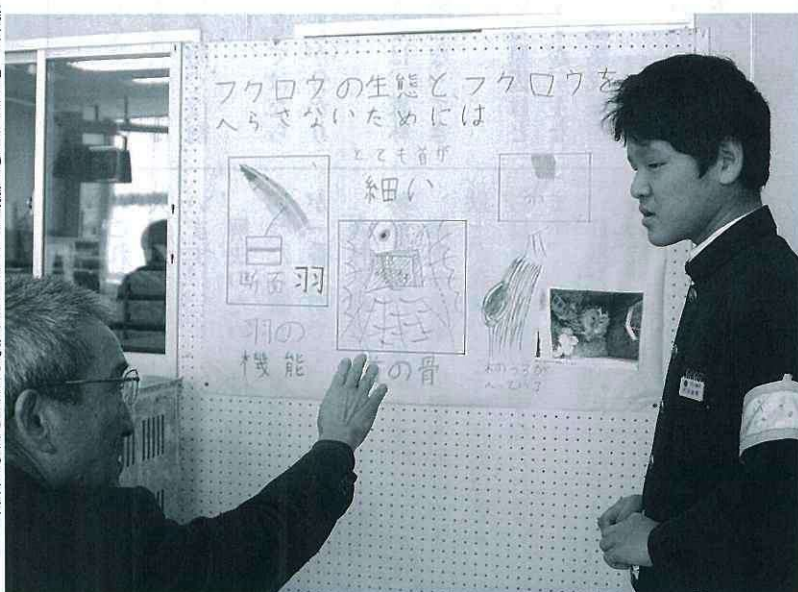
そしてどの発表にも、自然を守りたいという生徒たちの強い思いがありました。必死に伝えようとする生徒たちの姿がありました。

次のページでは、これら環境問題について学んできた生徒たちの「成果」と「思い」をご紹介します。

絶滅危惧種に関する研究発表



カモシカについての研究発表



発表：「フクロウの生態と、フクロウを減らさないためには」
フクロウの生態について質問する津村教員長（左）と大石さん（右）